

(実践報告)

本学における統合実習の見直しと今後の課題

山下真紀¹⁾ 岩崎淳子¹⁾ 武藤英理¹⁾ 齋藤良子¹⁾ 桐山啓一郎¹⁾
樹神千尋¹⁾ 清水八恵子¹⁾ 中村廣隆¹⁾ 村山晃子¹⁾ 須賀京子¹⁾

I. はじめに

2009年度のカリキュラム改正において、「看護の実践と統合」が教育内容に位置づけられ、より臨床実践に近い形で学習し、知識・技術を統合する内容となった。そして、その臨地実習においては、複数患者を受け持ち、一勤務帯を通した実習を行うこと、また夜間の実習も可能な範囲で実践するなど、臨床実践のもとで必要な基礎的な知識と技術を統合的に体験するとしている。また、文部科学省は、看護教育の教育課程について、「看護学モデル・コア・カリキュラム」を推進し、各大学は、「学士課程版看護実践能力と到達目標」を参照しつつ、その教育理念や特色に基づき、独自の教育課程を編成することが期待されている。

本学は2014年4月に開学し、2017年度より4年生前学期に2単位の統合実習が開講された。2018年度までは学生が希望する領域を選択し、各領域での検討された内容・方法での実習であり、領域により実習内容・方法にばらつきがあり、学生の学びにも影響がみられたため、2018年度の統合実習が終了した時点で、実習内容の見直しを行った。実習施設との契約等もあるため段階的に変更を行い、2020年度には全領域で統一した実習とすることを目標に、2019年度は学生による領域選択を残しながらも、可能な範囲で同じ実習内容・方法となるように修正した。実習終了後には担当教員による報告書の作成および学生アンケートを実施し、学生の学びと今後の課題が明らかとなったため、ここに報告する。

II. 実習要項の検討と作成

全領域に関わる実習の検討となることから、実習委員会にて要項を作成することとなった。本学実習委員会は各領域より1名ずつ委員が選出されており、委員会で提案された内容を各領域で検討し、領域としての意見を委員会に反映させることが可能である。そのため、委員会で担当者による要項(案)を提示し、各領域で検討した結果を意見として委員会で審議する方法で検討を重ね、要項の作成を行った。

1. 2018年度までの問題点

2018年度までの実習を表1に示す。実習目標・方法は学生自身で立案することになっており、その詳細は各領域に任されている。さらに実習施設も各領域の特徴に基づき、病棟や施設など様々である。実際の実習方法では、研究的な視点で1名の受けもちに対して看護過程を展開し実践する領域や、複数名の受けもちを想定して実践している領域、学生間でチームを作り、チームとしての看護実践をしている領域など、多種・多様であった。

そのような状況から、以下の点が問題として挙げられた。

- 1) 詳細な内容が各領域に任されているため、領域の特徴が大きく反映された実習になっている。
- 2) 各領域の特徴を反映した学びはあるが、「統合実習」として学びの到達状況が不明確である。
- 3) 領域により実習方法が異なるため、臨地実習の日数や記録物等も異なる。
- 4) 評価基準も領域で定めているため、統合実習という同じ科目であるはずが、学生は異なる基準で評価されている

以上のことから、領域間のばらつきを可能な限り是正し、「統合実習」としての学びをよりよいものとするために、実習の目的・目標から見直しを行うこととした。なお、その際には、指定規則における統合実習の位置

1) 朝日大学保健医療学部看護学科

表1: 2017年度～2018年度の統合実習(手引きより抜粋)

<p>【目的】 各領域の臨地実習から自身の課題を見つけ、関心のある領域を選択し、保健医療福祉の専門職と連携して対象者への看護を実践し、看護学における実習の学びを統合させる。</p>
<p>【目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. これまでに学習した看護学の知識と臨地実習を踏まえ関心のある領域を選択し、実習で探求したい課題を明らかにする。 2. 選択した領域の実習計画の中で自分の実習目標を示すことができる。 3. 保健医療福祉の他職種チームの一員として、看護師の果たす役割と責任を説明できる。 4. 実践した看護を振り返り、実習を評価できる。 5. 実習をまとめ、今後の課題や展望を述べるができる。
<p>【実習内容】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 統合実習の実施に関する原則 <ul style="list-style-type: none"> ・看護学のすべての実習の最後の実習になります。したがって、学生が「これまでに実習をまとめ、統合する実習」になります。 ・統合実習は看護過程を展開するこれまでの実習とは目的が異なるものです。 ・土曜日、日曜日、祝祭日、また夜勤実習はしません。 ＊保健師の臨地実習は統合実習が終了しなければ開始できません。 2. 各領域に共通する統合実習全体の目的、到達目標は学科で統一し、これに沿って各領域の実習方針や特徴に基づき2週間の実習内容、計画を立案します。 3. 領域の実習内容、実習計画案を学生に提示し、具体的な実施内容については学生と検討します。 4. 実習内容は一人の受け持ちから複数、あるいは病棟、フロア全体、地域全体を対象とする看護、保健医療福祉の関連機関との連携などを含むものとします。

づけを考慮し、領域選択は行うものの、全員が病棟で実習を行うことを基本とした。

2. 2019年度実習要項

2018年8月から、担当者により実習要項(案)の作成を行い、同年9月から委員会での審議・修正を重ね、実習目的・目標および実習方法を決定した。その内容を表2に示す。また実際の内容は実習病棟と調整の上決定すること注釈し、実習のスケジュール例も実習要項に提示した(表3)。シャドーイングと学生チームによる看護実践が主な実習方法である。学生は1名の患者を継続して受けもつが、チームとして複数名の患者を受けもつことで、優先順位の決定と多重課題への対応を学ぶ。記録用紙および評価表も統一し、問題であった領域による異なりが是正されるようにした。

学生は従来の領域選択ではなく、急性期看護、慢性期看護、母性看護、小児看護、精神看護のいずれかを選択することにした。また、教員は領域にとらわれず、統合実習の指導として担当することを確認した。

Ⅲ. 実習の実際と学生の学び

各施設において、シャドーイングの実施の有無や指導体制の異なり等はあったが、学生たちは概ね実習目標は到達できた。以下、実習目標に沿って述べる。

1. 看護管理者の役割を理解し、病棟管理の実際を理解できる

シャドーイングを通して、病棟看護師長の役割や看護管理の実際を理解することができた。病棟看護師長によるミニ講義の時間を設けていただいた病棟も多くあり、病棟管理の実際や経営としてのベッドコントロール・稼働状況・在院日数等についても説明していただけた。学生アンケートにおいても、「看護管理および看護組織について、よく理解できた」や「看護師長の話など、普段聞けないことを聞いて良かった」等の記載があり、シャドーイングだけでなく、看護師長の丁寧な説明が学生の理解を深めていたと考えられる。

表2：2019年度統合実習要項

<p>【目的】 これまで学んだ知識・技術・態度を統合し、実務に近い体制の看護を通して、医療チームの一員としての役割遂行をめざした看護実践能力を高める。また、今後の目標や課題を明らかにする。</p>
<p>【目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 看護管理者の役割を理解し、病棟管理の実際を理解できる 2. 看護におけるチームメンバーおよびリーダーの役割を理解し、メンバーシップを発揮できる 3. 多職種連携における看護師の役割について理解できる 4. 看護専門職としての自己の課題とその対策を述べるができる 5. 実習での学びを、文献を用いて考察し、レポートにまとめることができる
<p>【実習方法および内容】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 病棟看護師長より、看護師長の役割や看護管理の実際について説明を受ける。またシャドーイングを行い、その業務について学ぶ。 2. チームリーダーおよびチームメンバーのシャドーイングを行い、チームリーダーおよびメンバーの役割とそのあり方を学ぶ。 3. 病棟の看護チームの一員としての看護実践を行う。 4. 受けもち患者の看護は、病棟の方針を受けて看護過程を展開する。 5. 病棟で実施されるカンファレンスに参加し、チーム医療について学ぶ。 6. 実習カンファレンスを毎日30分程度実施する。一日の振り返りや今後の課題などを話し合うことで、学生同士が学びを共有する。

表3：2週間のスケジュール例

日程	場所	内容	その他
1 週 目	月	学内 オリエンテーション、 講義「看護部の位置づけと役割・機能」 事前学習の確認・追加	異なる期間に実習を行う学生も講義には参加する
	火	臨地 病棟オリエンテーション シャドーイング（看護師長・チームリーダー・メンバー） 多職種とのカンファレンス	
	水	臨地 シャドーイング（看護師長・チームリーダー・メンバー） 多職種とのカンファレンス	
	木	臨地 シャドーイング（師長・チームリーダー・メンバー） 多職種とのカンファレンス 受け持ち患者の決定	この日だけ 8：30～開始 朝の申し送りに参加する
	金	学内 受け持ち患者の疾患学習 看護ケアなどの確認 看護実践に向けてのチームでの役割確認	
2 週 目	月	臨地 チームでの看護実践	
	火	臨地 チームでの看護実践	
	水	臨地 チームでの看護実践	
	木	臨地 チームでの看護実践、最終カンファレンス	
	金	学内 実習のまとめ、レポート作成	

2. 看護におけるチームメンバーおよびリーダーの役割を理解し、メンバーシップを発揮できる

リーダーやメンバーのシャドーイングでは、担当看護師により、業務調整や何を実施しているのかなど、丁寧な説明をしていただき、貴重な学びとすることができた。指導体制の都合、シャドーイングが実施できない病棟もあったが、指導者よりそれぞれの役割について説明を受け、日々の看護実践の実際について質問をするなどし、理解を深めることができた。

学生間でチームとなり、協働して看護を実践する際には、互いの受けもち患者の情報を共有し、それぞれの優先順位を考え行動することができていた。報告・連絡・相談の優先順位がわからないという学生もいたが、カンファレンス等で検討することで、少しずつ、自分で考えて行動できるようになった。また、病棟によっては、ベテラン看護師とペアを組むことで、かなり実務に近い看護実践を行うことができた学生もおり、貴重な学びの時間となった。さらに、複数の患者を受け持つことを体験し、就職後の姿をイメージできる学生もいた。学生自身も、「メンバーの一員としての役割やメンバーシップ、メンバー間でのコミュニケーションなどを考え実践できた」や「チームで動くことで主体性を持つことができた」などと答えており、チームナーシングの実際を理解し、その一員として自分がどのように行動すべきかを考え、実践できていたと考えられる。

一方で、グループ間での協力が少なく、情報共有ができない学生も見受けられた。また積極性に欠ける学生や、看護計画の記録が白紙で提出される学生もおり、今後も指導を要する。

3. 多職種連携における看護師の役割について理解できる

受けもち患者に関係する他職種の関わりの実際やカンファレンスの見学、直接他職種（医療ソーシャルワーカーや社会福祉士など）から説明を受けたことなどから、他職種の専門性を理解し、患者を中心に看護職と他職種がどのように協働していくのか、看護職の専門性と役割について理解を深めることができた。特に、看護師が医療従事者のなかで患者に近い存在であるという気づきは学生の中で精緻化されている様子がうかがえた。

4. 看護専門職者としての自己の課題とその対策を述べることができる

日々のカンファレンスにおいて、メンバー間で学びを共有することにより、自らの看護実践を振り返り、考えを深めることができていた。ただし、レポートや記録で表現される内容は、明確なものではなく、特に対策についてはあいまいになっている学生も多く見受けられた。今後も継続して指導していく必要がある。

5. 実習での学びを、文献を用いて考察し、レポートにまとめることができる

全員が期限までに提出することができた。看護管理に関する内容等は記録用紙もないため、レポートとして書き始めていくように指導することで、早期から文献等を調べて充実したレポートにすることができる学生もいた。一方で、文献の参考・引用の方法が理解できていない学生も多く、引用した部分が多く、実習での体験や実践での学びについて触れられていない学生もいた。自身の看護実践の振り返りができ、根拠をもって考察できるよう指導していく必要がある。

IV. 今後の課題

1. 実習方法

1) シャドーイング

統合実習でのシャドーイングは、看護師の患者・家族への適切な対応を見学することで、看護のロールモデルとなり、近い将来への看護師像のイメージ化につながるということが報告されている（高下，加藤，2015）。また、管理者の役割・機能の理解、臨床実践の貴重な体験、管理者の倫理に関する理解に関しては管理者をロールモデルとしたシャドーイングによる効果が得られている（小野，塩見，掛屋他，2013）。実習指導者には、指導する余裕がないことやシャドーイングされることの負担感があることが報告されているが（高下，常石，2013）、本実習においてもシャドーイングによる学生の学びは一定のものを得られていると言える。今年度は実施できない病棟もあったため、短時間でも実施できるように病棟と調整していくことが必要と考える。

2) チームによる看護実践

学生アンケートには「実際に働いた時のイメージができた」との記載が多くみられ、この実習内容は、新人看護師が入職後に役に立った実習内容の主な項目としても挙げられている（辻田，田中，澤田他，2018）。また、「病棟全体や複数の患者さんと関わりを学んだ」や「優先順位を考え行動できた」などの記述が多くみられ、これらの学びは、看護実践能力における「ケア環境とチーム体制整備能力」の習得につながると考えられる。文部科学省による卒業時到達目標も踏まえ、対象者の状態や思いを理解し、チームと協働し、ケアの充実に責任を持てるような実習を今後も行っていく。

一方、グループ間での協力が少なく、情報共有ができない学生や積極性に欠けるも見受けられた。実習前にグループ演習を行うことで「チームワーク」を意識付け、統合実習への意識を変化させる学習活動として有用である（石村，池田，2017）との報告もあるため、オリエンテーション等の学内での実習時間を活用し、チームとしての準備が行える方法も検討していく。

また、病棟で立案された看護計画に基づいて実践を行ったため、疾患の理解や病態把握など、看護実践の根拠となるものの理解が不足している学生もいた。さらに、病棟の看護問題が「#心不全」や「#胃がん」などとなっていることやクリニカルパスの適応のため、看護計画が一般的な内容となっていることがあった。本来は異なる表記となることや、個別性のある看護計画とすることを確認していく必要もある。

3) 実習最終日およびレポート

実習施設の都合上、同一期間に実習を行えない病棟があった。そのため、学生全員でのまとめや報告会を行うことができず、学びの共有は日々の学生カンファレンスを実施するグループ間にとどまっている。学生はレポートを作成することで自身の学びをまとめ、今後の課題を明確化しているが、他学生の学びを聞くことで、学びは深まると考えられる。また、学生アンケートにおいても半数の学生が「人・グループ・病棟により学びが異なるので共有したい」などの理由から、実習最終日に学びの共有とする時間設定を希望していた。今後、よりよい学びとするための方法を検討していく。

4) 記録用紙

今年度の記録用紙は、最終レポートを作成することを鑑み、看護管理についての記録など詳細なものは設けず、①各日記録（目標と行動計画、その日の振り返りを記入）、②受けもち患者の全体像、③看護実践記録の3種類を用いた。しかし実習担当教員より、学生の振り返りが正しくできたかどうか不明であり、課題レポートにすべてを集約させると振り返りの機会がなくなってしまうとの意見があった。日々の記録の記入欄を増やすか様式を増やすなどを検討する必要がある。

2. 実習担当教員の指導・連絡体制

今年度は学生による領域選択肢を急性期看護、慢性期看護、母性看護、小児看護、精神看護としたため、急性期看護および慢性期看護については3領域（母性看護、小児看護、精神看護）以外の全教員が実習指導を担当したが、1病棟を2名の異なる領域の教員が指導したため、領域間での調整が困難であった。また、統合実習の連絡体制について不明な点も多く、教員間の連絡網もなかったため、事前に明確にしておく必要がある。

さらに、3領域（母性看護、小児看護、精神看護）については第1希望とする学生が少ない傾向があるとともに、各実習病棟の確保が困難な傾向もみられることから、今後、成人一般病棟での統合実習学生数を増やす必要性を検討する必要がある。その場合、教員は各自の専門領域の指導にとらわれずに統合実習としての指導担当であることを認識する必要があるため、事前に統合実習総括担当者が実習担当教員全員に統合実習の目的・目標、実習方法等について説明する機会を設け、全教員が共通の理解のもと適切な指導ができるようにしていく必要がある。

V おわりに

実習委員会において、2018年度より統合実習の目的・目標の見直しを行い、それらの目的・目標を達成できるような実習方法を検討し、2019年度に実施を試みた。実習担当教員の報告書や学生アンケート結果から、

学生たちの学びは大きく、学習効果の高い実習になったと考えられるが、前述したように課題も明確になった。

また、大島 (2018) は、基本的な看護技術が十分修得できていない学生に対し、「臨床実践に近い形で知識・技術を統合」に着目し、「看護管理」「チームリーダー」「患者複数受けもち」をキーワードに展開する実習で、それが身につくのか疑問を呈している。さらに、2010年の法改正により、新人に対する職業的な学びは、各機関に継続教育として行うことが努力義務化されたことに基づき、統合実習で完結させようと無理をするのではなく、継続的な能力育成の視野のもと、実践をともなう看護学としての本質を学び取る、再確認するような内容の必要性を投げかけている。本学においても、統合実習における学生の到達目標を明確にし、基本的な看護技術・知識の修得状況に合わせた実習の検討が今後も必要である。

以上の点を踏まえて今後の統合実習について検討・運営していくことは、実習環境の調整等が主な設置目的である実習委員会の活動の範疇を超えていると判断したため、2020年度以降の統合実習については、実習委員会の上位組織である教務学生委員会に申し送り、引き続き検討していくこととした。

<文 献>

- 石村珠美, 池田緑 (2017). 看護学生の「チームワーク力」の育成を目標としたグループ学習の効果の検討
看護統合実習に向けて. 看護教育研究学会誌, 9 (1), 39-48
- 小野晴子, 塩見和子, 掛屋純子, 磯本堯子, 柘野浩子, 土井英子 (2013). 臨床実践能力の修得につなげる統合実習の総合評価. 岡山県看護教育研究会誌, 37 (1), 16-24
- 大島由美子 (2018). 「統合実習」の内容と発展を振り返る. 看護教育, 59 (9), 774-779
- 高下智香子, 加藤かすみ (2015). 看護実践統合実習でのシャドーイングによる学生の学びと効果 インタビュー調査を行って. 中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌, 10, 9-12
- 辻田幸子, 田中彰子, 澤田和美, 橋本真由美, 金子直美 (2018). 効果的な「看護の統合と実践」の臨地実習の方法に関する研究 卒業生への質問紙調査から. 横浜創英大学研究論集, 5, 19-26